

もんじゅ廃炉そして伊方に溜まる核廃棄物

文責 森山賢太郎

もんじゅ廃炉、核燃料サイクルの破綻

昨年12月21日政府は高速増殖炉もんじゅ（福井県敦賀市）の廃炉を正式決定しました。もんじゅは核燃料サイクル政策の要として、1兆円超の国費がつぎ込まれ、わずか250日しか稼働せずに廃炉になりました。

高速増殖炉で使用済の核燃料（核廃棄物）を燃やすことによってプルトニウムが増え続け、それを核燃料として使えることで無限のサイクルで”増殖”していくということでした。資源のない我が国の準国産資源ともいわれてきました。ところが政府は「今後とも核燃料サイクルを堅持し高速炉開発を推進していく」といいます。

今後はフランスの実証炉（高速炉）の共同開発に参加していくとのこと。（高速炉は増殖しませんが）

これについて田中俊一原子力規制委員会委員長は「実証炉については私の理解では全く実態がない」と言い切っています。

「資源」の扱いの使用済核燃料がゴミの扱いに！

なぜ政府は核燃料サイクルの破綻を認めないのでしょうか。それは原発から発生する使用済核燃料は、これまで「資源」の扱いであったのに、破綻を認めた瞬間にそれが「核のゴミの扱い」になってしまうからです。（16.12.22毎日社説）

プルトニウムの恐怖、危険性の高いプルサーマル

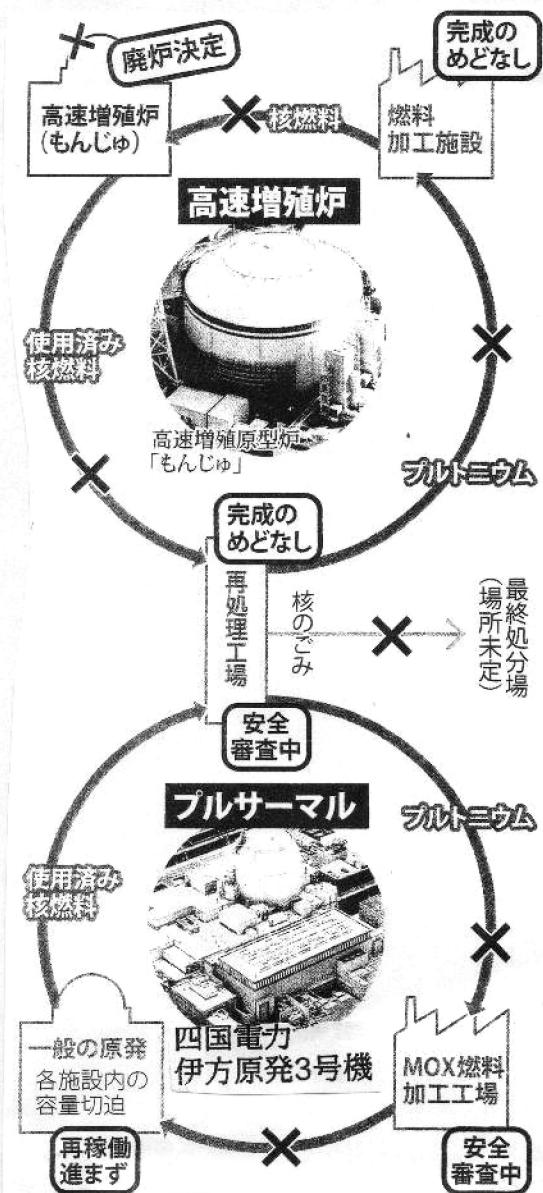
これまで日本が原発を推進してきた結果、47.9トンのプルトニウムを所有しており、これは長崎に投下された原爆数百発分相当。核兵器をもたない、そして被爆国である日本になぜこれほどの核兵器の材料があるのか。世界中から不審の目が日本の原発政策に注がれます。

プルトニウムを減らす目的で、ウランにプルトニウムを混ぜたMOX燃料使用の「プルサーマル発電」が無理やり、その任務を課せられています。

現在、伊方原発3号機だけが唯一国内で稼働しているプルサーマル発電です。1年間稼働してプルトニウム0.1トン減らせるとされており、47.9トンを減らすことは到底できません。

満杯に近づく「使用済核燃料プール」

各原発の核廃棄物はそれぞれで保管する可能性がたかまっています。核燃料サイクル破綻で青森県六ヶ所村再処理工場は不要となるでしょう（運転延期が度重なり完成のメドがたたず日本の技術力ではムリのようです）。これまで「資源」として受け入れ



ていた青森県も「核のゴミ」になった途端、受け取らなくなります。

各原発の使用済み核燃料プールは満杯に近付いており、四国電力は昨年末に「乾式貯蔵施設」の新設を検討すると発表しました。あの福島原発4号機事故で「使用済燃料プール」の冷却機能が失われ、あわや大惨事という事態がありました。そこで地震に強い保管法であるとして、水や電気を必要としない空冷の「乾式保管」が検討され始めました。

「乾式」による恒久貯蔵か、自治体に警戒感

乾式貯蔵の導入によって、恒久的に原発のある場所での危険極まりない核廃棄物保管が保障されることになり、私たちにとって今後大変な脅威になってくる可能性があります。